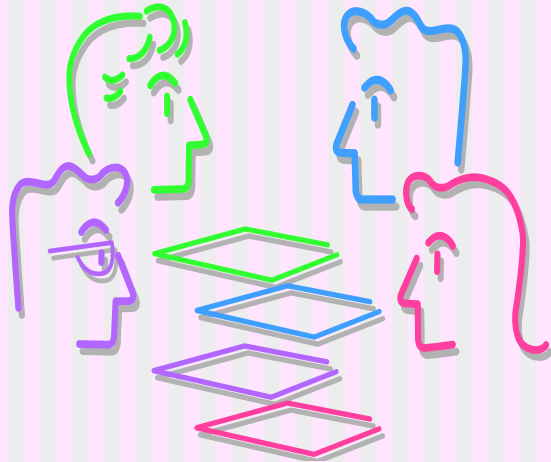


EIL発音を習得目標とする 学習者の要因

Aug. 20th 2011

JASELE第37回山形大会
山形大学 小白川キャンパス



神戸学院大学

中西 のりこ

nakanisi@ba.kobegakuin.ac.jp

1.1. 研究の背景(習得モデル)

- **NS (Native Speaker) 型:**
Native Speakerのような発音で話したい。
- **EIL (English as an International Language) 型:**
国際語として通用する発音で話したい。
通じるのであればNS発音にこだわらない。
- **JE (Japanese English) 型:**
自分の母語の影響を英語発音に残したい。

| | Melchers & Shaw (2003:30) | Brown (2008: 198-9) |
|-----|---------------------------|---------------------|
| NS | Conservative | Image |
| EIL | Liberal | Intelligibility |
| JE | Radical | Identity |

1.2. 研究の背景(習得モデル)

EIL発音モデルとは？

Melchers & Shaw (2003) “all varieties are linguistically equal and deserve equal recognition”

Brown (2008) “intelligibility is the main criterion. ... no desire to be mistaken for a native speaker”

- English as an International Language
- World Englishes
- English as a global language
- ‘Lingua Franca Core’

Kachru (1992), Jenkins (2000), Crystal (2007),
Kachru & Smith (2008)

⇒ “intelligibility”

1.3. 研究の背景(先行研究)

一方で

- “The concept of “intelligibility” is the least researched and least understood in linguistic or pedagogical literature” (Kachru, 1992:64)
- “Since EIL by definition no longer belongs to any one nation or culture, it seems reasonable that how this language is taught should not be linked to a particular culturally influenced methodology.” (McKay, 2006:124)
- 「「何をしたら伝わらなくなるのか」「何をしたら聴取者の心的辞書検索を妨げるか」に対する知識が必要」(峯松, 2005)
- “How good is good enough, though, is a tricky question, particularly in the age of world Englishes” (Shizuka, 2008)

1.4. 研究の背景(先行研究)

学習者が英語を使用する相手は？

Q 現在あなたが日常英語で話をする機会を
下の3つを合わせて100%とすると、何%ぐらいの比率になりますか。

- A.英語を母語とする人を相手に話す機会 (NS環境)
- B.英語、日本語以外の言語を母語とする人を相手に話す機会 (EIL環境)
- C.日本語を母語とする人を相手に話す機会 (JE環境)

平均値 (SD) 非英語専攻大学生 $n=283$ 中西 (2008)

| | NS環境 | EIL環境 | JE環境 |
|--------|--------------|------------|---------------------|
| NS目標群 | 6.8% (12.3) | 4.2% (9.8) | 86.7% (21.1) |
| EIL目標群 | 7.1% (14.6) | 2.9% (8.9) | 88.9% (22.5) |
| JE目標群 | 11.0% (21.1) | 2.9% (8.9) | 75.7% (33.3) |

1.5. 研究の背景(先行研究)

EILを目標とする学習者の属性

- JEを目標とする学習者、教員は少数
- **EIL**志向に影響を及ぼす要素:

| 学生 | 教員 |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 英語専攻／ 非英語専攻 | 小学校 ／中学校 |
| 将来仕事上の英語使用頻度 高い／ 低い | — |
| — | 自分の英語発音に対する自信 強い／ 弱い |
| 総合的な英語習熟度 高い／ 低い | — |

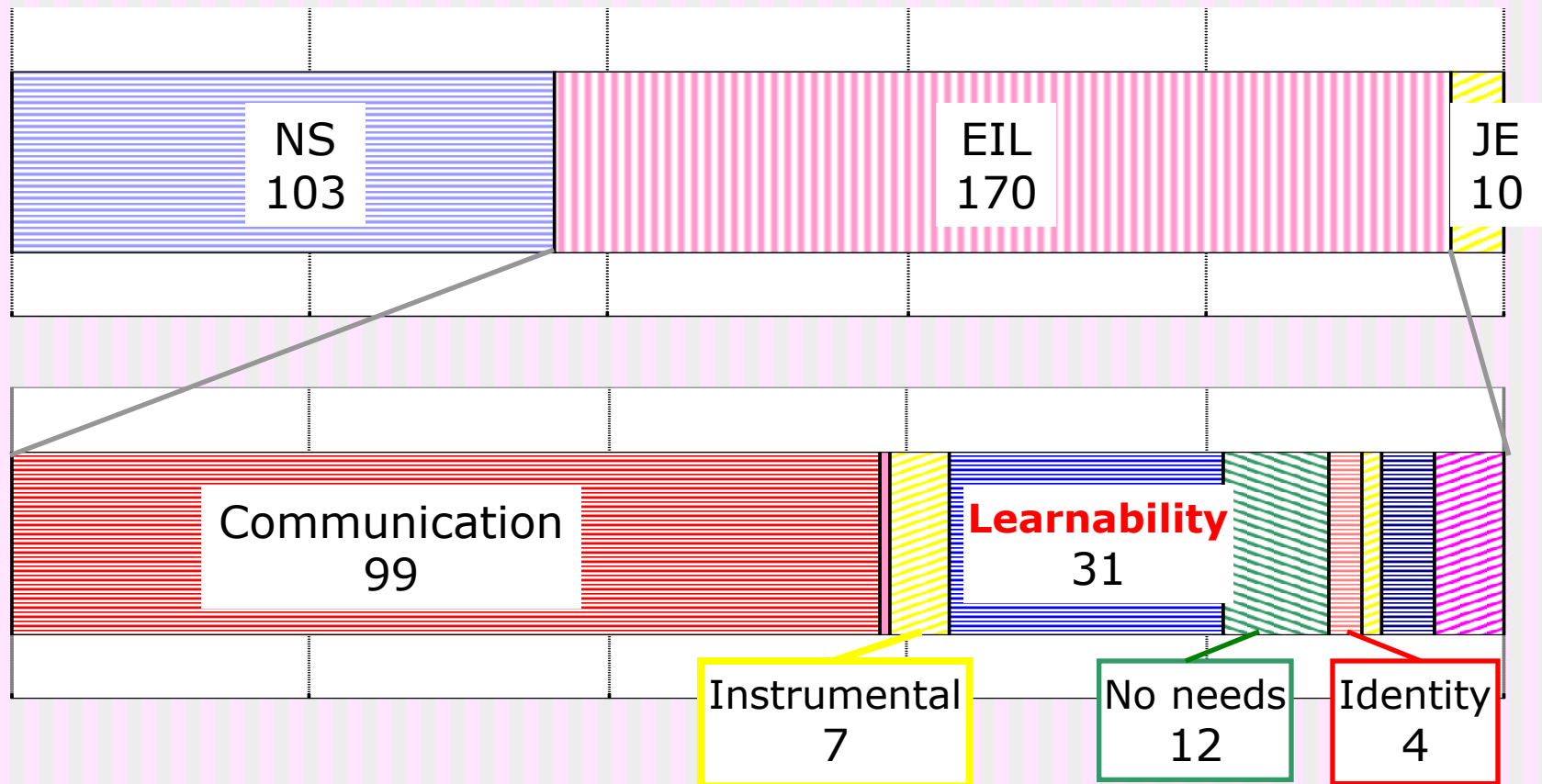
河内山他(2011), Nakanishi (2011)

1.6. 研究の背景(先行研究)

「言いたいことが相手に伝わるのであれば、発音にはこだわらない。」

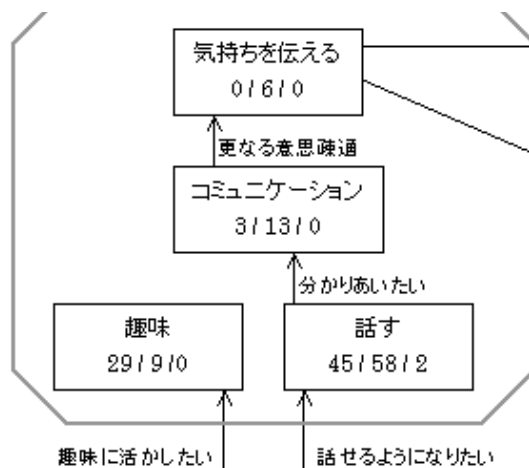
Q 「上の答えを選んだ理由を思いついた順に3つまで書いてください」

非英語専攻大学生 $n=283$ 中西 (2008)

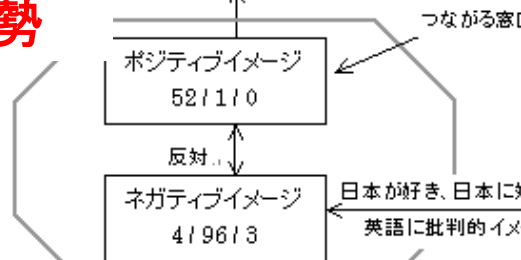


1.7. 研究の背景(先行研究)

a. 英語を学ぶことで達成される理想像

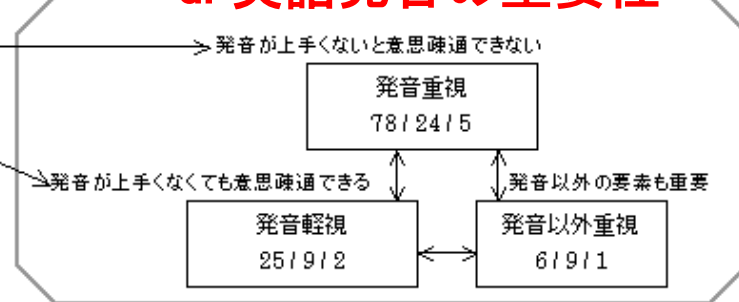


b. 積極的に学ぶ姿勢

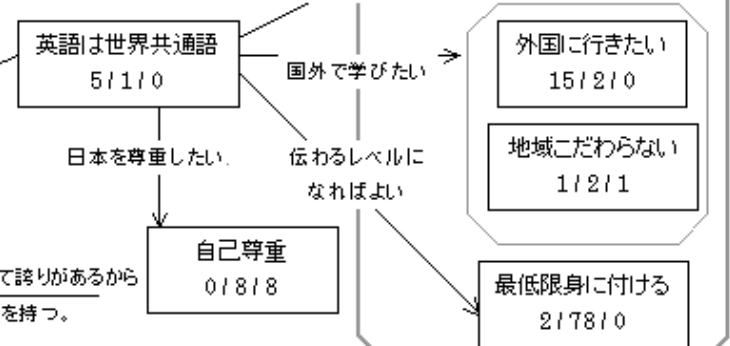


c. 英語に対するイメージ

d. 英語発音の重要性



英語がインターナショナルな世界において重要視されている



e. 英語の必要性

2.1. 方法(研究の目的)

EIL発音を目標とする学習者の属性を探る。

- **所属:**

非英語専攻、必修科目履修生はEIL志向が強い？

- **将来の英語使用機会:**

仕事で英語を使用する頻度が低いと考える学習者ほどEIL志向が強い？

- **EIL発音を選択した理由:**

本当に「通じる英語」を目指しているか？

「通じれば十分」と考える学生を対象に
発音指導をする際に、何をすればよいのか？

2.2.方法(調査紙、回答者)

■ 調査紙作成(9項目)

(問8:中西(2008)の結果 →KJ法による再分析(中西2011)
→選択肢を作成)

■ 「英語学習に対する意識調査」

予稿集

2011年度初回授業時

9項目のうち、3項目に対する回答を分析

■ 回答者:

- **語学系** 公立大学で**必修、選択**科目を履修する
1-3年生 5クラス ($n=131$)
- **非語学系** 私立大学で**選択**科目を履修する
1-4年生 7クラス ($n=142$)
- **非語学系** 私立大学で半**必修**科目を履修する
1年生 8クラス ($n=217$)

3.1. 結果 (所属別)

| | NS | EIL | JE | 無回答 | 計 |
|-------------|--------------------|---------------------|-----------|-----------|---------------|
| 語学系 必・選 | 99 (76%) | 26 (20%) | 6 (5%) | 0 (0%) | 131 (100%) |
| 非語学系 選択 | 61 (43%) | 78 (55%) | 3 (2%) | 0 (0%) | 142 (100%) |
| 非語学系 半必修 | 82 (38%) | 129 (59%) | 3 (1%) | 3 (1%) | 217 (100%) |
| 計 | 242 | 233 | 12 | 3 | 490 |

3.2. 結果 (将来の英語使用機会別)

| | NS | EIL | JE | 無回答 | 計 |
|---------|-------------|---------------------|-----------|-----------|---------------|
| 全く使わない | 10 (50%) | 10 (50%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 20 (100%) |
| あまり使わない | 48 (34%) | 93 (65%) | 2 (1%) | 0 (0%) | 143 (100%) |
| たまに使う | 86 (47%) | 90 (49%) | 5 (3%) | 2 (1%) | 183 (100%) |
| よく使う | 98 (70%) | 37 (26%) | 4 (3%) | 1 (1%) | 140 (100%) |
| 無回答 | 0 | 0 | 3 | 1 | 4 |

3.3. 結果（重視することがら別）

NS型 「重視することがら」 回答2つのクロス表

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
|---------------|-----|----|----|----|---|----|---|-----|---|
| 1 コミュニケーション | | | | | | | | | |
| 2 趣味、娯楽で英語使用 | 20 | | | | | | | | |
| 3 英語学習に対する姿勢 | 25 | 0 | | | | | | | |
| 4 英語ポジティブイメージ | 30 | 0 | 1 | | | | | | |
| 5 英語ネガティブイメージ | 2 | 0 | 0 | 0 | | | | | |
| 6 英語発音は重要 | 29 | 2 | 2 | 1 | 0 | | | | |
| 7 英語発音は重要でない | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | | | |
| 8 英語は将来必要 | 108 | 1 | 4 | 5 | 1 | 3 | 0 | | |
| 9 英語こだわる必要はない | 5 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | |
| 合計 | 220 | 24 | 32 | 37 | 3 | 38 | 1 | 122 | 7 |

予稿集

- 8-1: **将来必要**だから**コミュニケーション**をとれるようになりたい。
- 4-1: **英語が好き**だから**コミュニケーション**をとれるようになりたい。
- 1-6: **コミュニケーション**をとりたいたから**発音**は重要。
- 1-3: **コミュニケーション**をとりたいたから**英語学習**をがんばりたい。

3.4. 結果（重視することから別）

EIL型 「重視することから」回答2つのクロス表

| | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
|---------------|-----------|----|-----------|----|----|----|----|-----|----|
| 1 コミュニケーション | | | | | | | | | |
| 2 趣味、娯楽で英語使用 | 14 | | | | | | | | |
| 3 英語学習に対する姿勢 | 23 | 5 | | | | | | | |
| 4 英語ポジティブイメージ | 12 | 1 | 1 | | | | | | |
| 5 英語ネガティブイメージ | 4 | 1 | 4 | 0 | | | | | |
| 6 英語発音は重要 | 6 | 0 | 2 | 0 | 0 | | | | |
| 7 英語発音は重要でない | 2 | 1 | 3 | 1 | 0 | 0 | | | |
| 8 英語は将来必要 | 65 | 6 | 22 | 1 | 9 | 6 | 0 | | |
| 9 英語こだわる必要はない | 12 | 8 | 6 | 3 | 5 | 2 | 3 | 5 | |
| 合計 | 138 | 36 | 66 | 19 | 23 | 16 | 10 | 114 | 44 |

予稿集

- 8-1: **将来必要**だから**コミュニケーション**をとれるようになりたい。
- 1-3: **コミュニケーション**をとりたいから**英語学習**をがんばりたい。
- 8-3: **将来必要**だから**英語学習**をがんばりたい。

4.1. 考察(所属) スライド11

- 英語を必修科目/選択科目として履修しているかに関わらず、非英語専攻学生は英語専攻学生よりもEIL志向が強い。
- 非英語専攻学生の半数以上がEIL志向。

→ 先行研究と同様の結果。 スライド6

→ 非英語専攻の学生は英語発音に対して、「**正しさ** (NSらしさ)」以外にも**多様な要素**を求めている？

→ 非英語専攻の学生に対して発音指導を行う際には、「NSに近いか」以外にも「**伝わるか**」も基準に。

4.2. 考察(将来の英語使用機会)

- 将来の仕事で英語を使用する頻度が低いと感じる学生ほどEIL志向が強い。 **スライド12**
- 「あまり使わない」回答者の6割以上がEIL志向。
 - 先行研究と同様の結果。 **スライド6**
 - 仕事で英語を使用する頻度が低いと考える学生は、「発音にはこだわらない」?
 - 仕事で必要に迫られて英語を使用する以外に、「言いたいことを相手に伝える」という機会がイメージできているか? **スライド4**
 - 「相手」とは誰か? **スライド5**

4.3. 考察(重視することから 全体像)

回答者が選択した項目 多い順

予稿集

| NS群 | EIL群 |
|--|--|
| コミュニケーション 英語は将来必要 英語 発音 は重要 英語が 好き 英語学習をがんばる | コミュニケーション 英語は将来必要 英語学習をがんばる 英語に こだわる必要ない 趣味、娯楽 で英語使用 |

EIL群内では「英語発音」に関する項目選択は最少。

→[英語は世界共通語]⇒[英語に対するポジティブイメージ]⇒[積極的に学ぶ]⇒[気持ちを伝える]⇒[発音の重要性]のプロセスをたどらない？

スライド8

4.4. 考察(重視することから a)

1. コミュニケーションのための英語 **NS** > **EIL**

EIL群の約6割が選択(NS群では約9割)
(約4割の回答者は選択していない)。

→「**言いたいことが相手に伝わるのであれば**」という本来のEIL目標と矛盾していないか? **スライド7**

2. 趣味、娯楽のための英語 **NS** < **EIL**

中西(2011)では **NS** > **EIL**。

→「NS群は英語発音をコミュニケーションの手段として以外にも、**付加価値**として捉える」と考えられたが、保留。(自由記述と選択回答の違い?) **スライド8**

4.5. 考察(重視することから b)

3. 英語学習に対する姿勢 NS < **EIL**

EIL群の3割弱が選択(NS群では1割強)。

- 調査が4月の**初回授業時**であったことも関係？
- 同じ質問を**最終授業時**に実施しても同様の結果が得られるか？
- 直近の「**学習**」**そのもの**に注目する傾向？

「将来必要+英語学習をがんばる」のペアを選択した回答者はEIL > NS。

- 何をがんばれば**、「言いたいことが相手に伝わるのか」「将来役立つのか」に着目するような言葉かけが必要。 **スライド4**

4.6. 考察(重視することから c, d)

4. 英語に対するポジティブイメージ **NS** > EIL

5. 英語に対するネガティブイメージ NS < **EIL**

NS群は「英語好き」傾向、EIL群は「嫌い \geq (?)好き」
→中には、英語そのものが嫌いだから
「発音にはこだわらない」という人もいるのでは？

6. 英語発音は重要 **NS** > EIL

7. 英語発音は重要でない NS < **EIL**

NS群は「重要」傾向、EIL群は「重要 \geq 重要でない」
→発音の重要性を認めながらも、
「伝わるのであれば発音にはこだわらない」？

4.7. 考察(重視することから e)

8. 英語は将来必要

NS ≒ EIL

NS, EIL群ともに約5割が選択

- EIL群も、NE群と同程度に必要性を感じている。
- 問5の結果と矛盾？ **スライド12**
- 「仕事」以外での英語使用を考えている？

9. 英語にこだわる必要はない

NS < EIL

EIL群の約2割が選択

- 「**英語発音**にこだわらない」のではなく、
「**英語自体**にこだわらない」？

スライド20

5. 教育的示唆

EIL発音は英語学習からの「逃げ」の手段ではない。
習得目標が異なる学習者がいる教室内で
「NS発音にこだわらない」という学習者に
何を指導すればよいのか？

- (学習者)**本当に**「こだわらない」のか？
ex) 発音が「苦手」「自信ない」「難しい」「無理」？
- (JTE) どのような発音が**unintelligible**なのか知る。
伝わらない時のStrategyを教える。
ex) Segmental? Prosody? / Rephrase, Spell out,
- (ALT) 学習者に**「伝わらない」という経験**を与える。
ex) ALTにとって新情報を教材に。

参考文献

- Brown, A. (2008). Pronunciation and good language learners. In C. Griffiths (ed.) *Lessons from good language learners* (pp. 197–207). Cambridge: Cambridge University Press.
- Crystal, D. (2007). *English as a global language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language*. Oxford: Oxford University Press.
- Kachru, B. B. (ed.) (1992). *The other tongue, English across cultures: Models for non-native Englishes*. Urbana: University of Illinois Press.
- Kachru, Y. & Smith, L. E. (2008). *Cultures, Contexts, and World Englishes*. New York: Routledge.
- 川喜田二郎. (1996). 『KJ法と未来学 : KJ法普及の問題点 KJ法と文明の未来 チームワーク』東京: 中央公論社.
- 河内山真理, 山本誠子, 中西のりこ, 有本純, 山本勝巳. (2011). 「小中学校教員の発音指導に対する意識調査—アンケート調査による考察」. 『LET関西支部研究収録』(13), 57–78.

- McKay, S. L. (2006). EIL curriculum development. In R. Rubdy and M. Saraceni (eds), *English in the world* (pp. 114–129), London, Continuum.
- Melchers, G. & Shaw, P. (2003). *World Englishes: an introduction*. London: Arnold.
- 峯松信明, 岡部浩司, シューヘンリック, 広瀬啓吉. (2005). 「米語母語話者を対象とした日本人英語の聞き取り調査」『電子情報通信学会技術研究報告』Sp, 音声. 104 (630), 31–36.
- 中西のりこ. (2008). 「英語を専門としない学生の発音学習に対する意識 – World Englishes 時代に求められる英語発音」『神戸学院大学経営学論集』第5巻1号, 1–15.
- 中西のりこ. (2011). 「英語発音の習得目標モデルと学習者の個人的要因の関係: KJ法を用いた分析」『LET第51回全国研究大会発表要項』, 122–3.
- Nakanishi, N. (2011). Preferred English pronunciation models for learners and teachers in Japan: In relation to their needs and confidence. Proc. JACET The 50th Commemorative International Convention.
- Shizuka, T. (2008). The effects of a 24-session EFL pronunciation course as reflected in learners' self-reports. *JACET Journal*. (47), 67–80.
- 田中博晃. (2011). 「英語教育研究法を捉え直す – 不要な混乱を避けるための視点 –」『より良い外国語教育研究のための方法』外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部メソドロジー研究部会2010年度報告論集, 17–29.